

教育課程のリデザインによる  
更なる学力向上の取り組み

令和2年2月

東大和市立第五中学校

# 目次

1	研究主題	2
2	主題設定の理由及び研究のねらい	2
3	学力の推移	2
4	学力向上を図るための考え方	3
	(1)全教員が当事者意識をもつこと	
	(2)授業改善とともにすべきこと	
	①生活指導(第1段階)	
	②社会性の向上(第2段階)	
	③学びの支援(第3段階)	
	(3)教育課程のリデザイン	
	①慣例の見直し	
	②定期考査の廃止(単元テストの導入)	
	③全員学級担任制の導入	
5	学力向上のための具体策	4
	(1)生活指導(第1段階)	
	(2)社会性の向上(第2段階)	
	(3)学びの支援(第3段階)	
	学力の向上と社会性の向上の相関図	6
6	本校で作成・活用している書式	8
7	成果と課題	10
	(1)成果	
	(2)課題	

# 1 研究主題

「教育課程のリデザインによる更なる学力向上の取り組み」

## 2 主題設定の理由及び研究のねらい

本校は 真如 昌美 教育長が年度当初に示した教育に関する方針に基づき、多様な学力向上策に取り組んできた。学力向上の視点から従前までの取り組みをとらえ直して再価値付けし、新たな取り組みも導入して学力を向上させるために教育課程を刷新することとした。

### 教育長の示す教育に関する方針（抜粋）

○生きる力の育成

創意・工夫を活かした特色ある教育活動

○学校との連携・協議

職層ごとの責任を明確にし、学校組織の機能を高める。

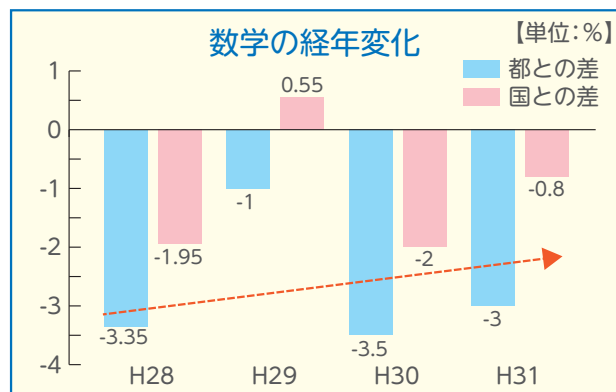
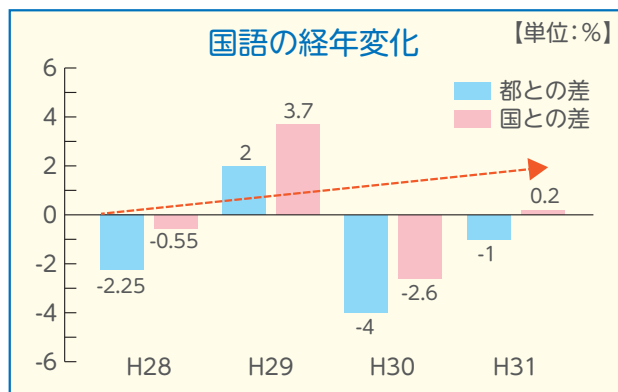
○社会との連携・協議

日常生活習慣や社会的自立など家庭や地域の教育力も求める。

## 3 学力の推移

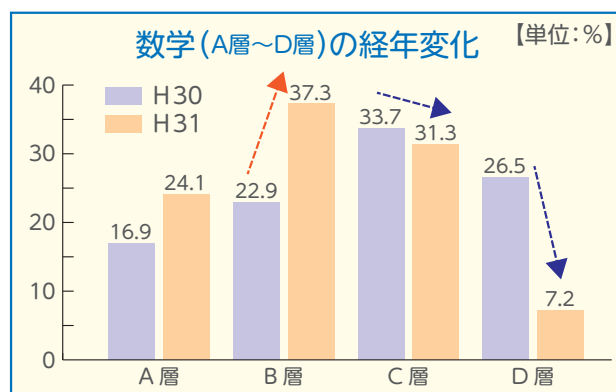
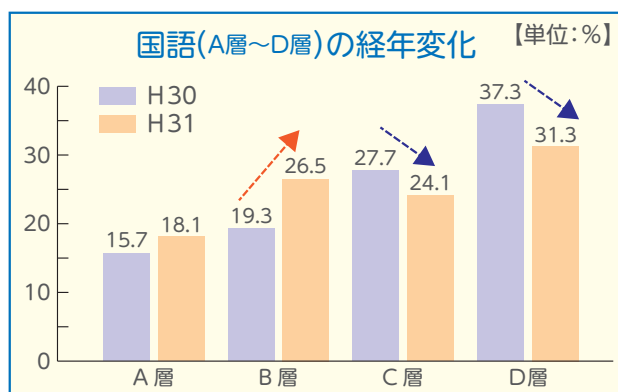
### (1)全国学力・学習状況調査結果の経年変化

国語・数学ともに国と東京都との平均正答率の差が改善された。



### (2)児童・生徒の学力向上を図るための調査結果の昨年度との比較

平均正答率の分布において、C層・D層が減少し、B層が増加した。



## 4 学力向上を図るための考え方

重要なことは教員の個人的な教育観や指導観に頼らず、本校（組織）の教育観や指導観に沿って教育活動に取り組むことである。本校は過去に各教員の指導の方向性が定まらず、子供の荒れが継続していた。そこで、管理職が7年前から職層ごとに職責を意識させ（特に主幹教諭のリーダーシップを引き出し）、組織としての教育観や指導観を見える化（＝マニュアル化）することによって荒れを終息させ、本校は国と東京都から表彰されるに至った。

表彰された内容（主題：組織的な生活指導）

- 平成 28 年度東京都教育委員会教職員表彰
- 平成 29 年度文部科学大臣優秀教職員表彰

教育観と指導観を統一する視点

- 分掌や特別委員会等に関わる起案は、例外なく分掌主任（主幹教諭）を経てライン決済することを徹底し、監督層の力を活かして組織力を高める。
- 各教員の指導の成功体験は前任校までの経験にしか過ぎず、本校の取り組みの経緯を理解することに努めさせ、組織の一員としての自覚を促す。

(1)全教員が当事者意識をもつこと

- ①国語・数学等の教科担任だけに任せず、学年団で教科を越えて取り組む。
- ②学年団で取り組みに差異が生じないように教務部が中心となって全学年で取り組みを共通化する。

(2)授業改善とともにすべきこと

本校では学力を向上させるために3つの段階が必要であった。

①生活指導（第1段階）

全ての子供の学習権を保障するために落ち着きのある学校環境を保つ。

②社会性の向上（第2段階）

子供が主体的に学ぼうとする心をはぐくむために向上心と家庭教育を啓発する。

③学びの支援（第3段階）

学力を向上させるために授業、補習、家庭学習の支援策を練る。

(3)教育課程のリデザイン

①慣例の見直し

千代田区立麴町中学校の取り組みを参考にして本校の生徒の実態に沿う教育課程を編成した（本校長が以前の所属先で現麴町中学校長の 工藤 勇一 氏から様々な助言を得られていたことから、今回も助言を受けることができた）。

②定期考査の廃止（単元テストの導入）〔新規〕

本校が独自に取り組む「家庭学習記録シート」の昨年度までの集計結果から、定期考査前には学習時間が増えるが、日常の家庭学習の時間が不足している事態が判明していた。さらには学習

範囲の広い定期考査では学びきれないことから、単元や題材事等のまとめりごとにテストを行い、家庭学習の時間の確保と学びの定着を図ることとした。

### ③全員学級担任制の導入〔新規〕

介護事情や育児事情等の諸事情で学級担任を辞退する教員が少なからずおり、組織の編成がままならない状況があった。さらに中学校では教科による授業時数の偏りが大きく、学級担任を受けもつことで特定の教員の負担感が増す課題があった。

そこで発想を変え、次の視点から全教員を学級担任にすることとした。

#### 全員学級担任制の導入の視点

- 学級担任を「できる」・「できない」論ではなく、全教員が与えられた条件の中で当事者意識をもって、子供をはぐくむ意識を醸成する。
- 通知表の所見を廃止して、特定の教員が一部の子供を見立てる前例を見直す。
- 合唱コンクールや運動会における朝練習等の勤務時間外の出勤について、学級担任と副学級担任に意識の差があったことから、全教員で負担感を平均化する（朝練習が勤務上、適切なのか基本的な課題はある）。

## 5 学力向上のための具体策

### (1)生活指導（第1段階）

#### ①授業と生活指導チェックカード【資料1】

生活指導の課題が子供や家庭に原因があると一般化せずに教員の指導力に視点を当て、全教員が同じ教育観や指導観を基にして生活指導をしているのかをセルフチェックする。毎月、自身の指導が自己流になっていないかを振り返る。

#### ②生活指導報告書の作成【資料2】

子供が荒れる要因として問題行動の情報が共有されず、他学年の指導が見えないことがある。そこで、全教員に共通の書式による報告書の作成を義務化して指導の担当者や指導の経過を「見える化」することにより、学年を越えて一人ひとりの子供の指導に当事者意識をもつ。

#### ③ジュンカイダーによる校内巡回〔改定〕

従前から空き時間の教員が全学級を巡回して子供の監護に努めてきたが、今年度から特別支援学級の教員も巡回に参加することとし、級種を越えて落ち着きのある校内環境の保持に努める。

#### ④チーム医療型の特別支援教育〔新規〕

（特別な支援を必要とする生徒の支援表【資料3】）

通常の学級にも困り感のある子供が在籍していることから、心理士やスクールカウンセラー、特別支援教育専門員らが外部の医療関係者と連携してそれぞれの専門的な見地から支援の在り方を探る。

## (2)社会性の向上（第2段階）

### ⑤中学生の教科学習【資料4】

「東大和市共通プログラム」で示される1単位時間の授業展開を徹底するために、全教科担任が共通した指導を実践する。特に本校独自の取り組みである「家庭学習記録シート」の活用を徹底し、教員の個人的な教育観や指導観に偏重しないことに努める。

### ⑥全員学級担任制の導入【新規】

子供や保護者に相談できる教員の窓口を増やし、困り感や不安感の解消を図る。教員は誰もが気兼ねなく年次有給休暇の取得や出張することができ、複眼的に子供を見立てて業務を効率化する。

### ⑦学校生活の自己評価【資料5】

子供へ学期ごとに規範意識や公共心、向上心を振り返らせて日常の学校生活や学習への取り組みを見つめ直させ、主体的に改善しようとする意欲をはぐくむ。教員は子供に励ましや助言を与え、自己肯定感をはぐくむ。

### ⑧家庭教育の啓発

家庭学習が未定着の子供が多いため、数値による目標値を定めて家庭学習のめあてをもたせる。「7・2・1の取り組み」として、7時間の睡眠、2時間の家庭学習、登校1時間前の起床に保護者と共に取り組む。

## (3)学びの支援（第3段階）

### ⑨家庭教育の徹底（家庭学習記録シート【改訂】【資料6】）

「7・2・1の取り組み」を徹底するために家庭学習へめあてをもたせ、全教科の授業で宿題を課す。教務部は全ての子供に印刷・配布し、通年で本シートをファイリングさせて主体的な学びにつなげ、取り組みを集計して課題が見える化する。

### ⑩小中合同の授業（CAN-DOリスト【資料7】）

昨年度開発した「第五中学校グループ外国語教育モデルカリキュラム」を用いて、春季休業中のFirst Step Schoolで入学する第6学年の児童を対象に小・中学校の教員が合同で授業を行い、円滑な授業の接続に取り組む。

### ⑪様々な教育活動【改定】

地域未来塾事業を活用して放課後の補習教室に塾講師や教職を目指す大学生を招く。さらには、今年度から本市の教育ボランティア事業を活用して授業のアシスタントとして教職を目指す大学生を招く。

### ⑫教育課程のリデザイン（単元テスト【資料8】）

生徒にとって定期考査は広範囲で学びきれずに低得点の子供は自己肯定感をもてず、高得点の子供には学びの最大瞬間風速となり、知識・理解が深まるとは言い切れなかった。そこで、単元ごとに学びを振り返ることとした。

## I 生活

①～④

全教員が自己の学習指導力を高めるために、毎月「生徒と会話しているか」「教室の環境チェックをしているか」「自己の指導力の向上に努めているか」などの10項目についてセルフチェックを行う。

問題行動の指導にあたる教員は統一した書式に経過を記録し、全教員で情報を共有して全ての問題行動に当事者意識をもつ。

### 《武蔵野美術大学》

学校を美術館に仕立てる「ムサビる!」を通して、豊かな情操をはぐくむ。

### 《明星大学》

放課後の補習（地域未来塾）へ学生をボランティアとして招き学習支援にあたる。

### 《都立青

就業技術して働くが授業を勤労観を

授業と生活指導を関連付けて全教科担任が実践すべき6点を義務化し、生徒の規範意識を高める。

- ①始業の挨拶と身だしなみ
- ②出席確認（呼名）
- ③忘れ物指導
- ④授業の工夫・改善
- ⑤終業の挨拶
- ⑥職員室での生徒の情報交換

学習の繰り返しの徹底を図る。

- ①始業前の書き写し読書
- ②定期考査の廃止【資料8】  
単元テストを導入し、全教科で単元のまとまりごとにテストを実施することから、毎日の家庭学習が深まる。
- ③First Step School( 新入生を対象とする春季休業中のプレ授業体験)

本市や都の事業、外部機関の取り組みを活用して学習機会を増やす。

- ①日本漢字能力検定
- ②実用英語技能検定
- ③地域未来塾事業（放課後の補習）

学年団で教科担任を支援し、放課後の補習を実施する。

- ①追試学習会（単元テストの不合格者の再テスト）
- ②漢字大学校（漢字の再テスト）
- ③英検対策（検定前の予備学習）

「第五中学校グループ外国語教育モデルカリキュラム」を作成してCAN-DOリストを開発し、小学校と中学校の英語の学習の接続を円滑にする。【資料7】

「家庭学習記録シート」を全生徒に配布し、教科担任から課される単元テスト対策の家庭学習の取り組みを記録することにより学習内容を振り返り易くする。【資料6】

## 小・中・高・

# III 学びの支援

9  
12

①「授業と生活指導チェックカード」【資料1】

②「生活指導報告書」の作成【資料2】

⑫教育課程のリデザイン

目指す小中  
系統性と連続性  
9年間を見通  
編成することにより

⑪教育活動の多様化

IMO  
Commun

学びのキャンパ  
地域社会が職場体験  
積極的に取組む  
生徒の社会性を

⑩小中共同の教材開発

家庭教育の徹底

⑨

## 指導

全教員が通年で空き時間に全教室を巡回して生徒の学習態度を観察するとともに相互に授業を見合いながら授業力を高め合う。

医療現場の取り組みである「チーム医療」のシステムを導入し、巡回指導教員や教育相談スーパーバイザー、教育心理相談員、専門医らがそれぞれの専門性を活かして困り感のある生徒を支援する。

### 《峰学園》

科へ訪問  
ことを学  
見学し、  
はぐくむ。

### 《京都市立東山総合支援学校》

修学旅行時に当該校  
を訪問して就業に関  
わる学びを高校生と  
深める。

### 《都立東大和南高等学校》

合唱コンクールで当該  
校の音楽科の教員を  
審査員として指導・  
講評を依頼する。

「特別な支援を必要とする生徒の支援表」を作成して支援の経過を記録することにより全教員で共通理解し、全校対体制で困り感のある生徒を支援する。【資料3】

## 大の連携

3

ジュンカイダー  
による校内巡回

### 一貫教育

のある義務教育  
した教育課程を  
学力の向上を図る。

# -ZO ity School

### スとしての地域

やボランティア活動に  
ことを通して児童・  
向上させる。

家庭教育の  
啓発

8

7・2・1の取り組み(7時間の睡眠、  
2時間の家庭学習、登校1時間前の  
起床)を通して、望ましい生活習慣  
を身に付けさせる。

チーム医療型の  
特別支援教育

教育課程の  
リデザイン

小中一貫教育  
の推進

「学校生活の  
評価」  
【資料5】

# Ⅱ 社会性の向上

5  
8

「中学生の教科学習」をマニュアル  
化して個々の教員の指導観に偏重し  
ない授業規律を全教科担任で統一す  
る。【資料4】

全員学級担任制を導入して生徒や保  
護者が相談したい教員の窓口を増や  
すことにより、家庭との連携を深め  
る。

職場体験先の事業所を第五中学校区  
内で完結することを目指し、地域  
の方々からご指導を得ることにより、  
地域社会に貢献する児童・生徒をは  
ぐくむ。

系統性と連続性のある義務教育9年  
間を見通した教育課程を編成して小  
中学校が一体となって生徒の義務教  
育後の進路を拓く。

学校教育プログラム「リーダー・イ  
ン・ミー」を小中学校で導入して  
リーダーシップ教育に取り組むこと  
により、児童・生徒の自己肯定感を  
高める。

各学期末に生徒へ規範意識(時間を  
守ること、身だしなみ、マナー)や  
向上心(学習、学校行事)を振り返  
させ自己理解を促す。







## 7 成果と課題

### (1)成果

学力の向上は年度ごとの微増減があるが、経年で測ると国との差は減少している。  
国語では漢字の「書くこと」・「読むこと」と文章の「係り受け」の知識・理解に課題があるので、これらの習得を入学者選抜と関連付けて効率的に取り組んだ。

#### 国語の学力を向上させる具体策

- 入学者選抜の過去 10 年間の出題を分析すると、漢字の書きは全て日本漢字能検定の 4 級・5 級レベル(漢字配当表の第 3 学年～第 6 学年)であった。漢字の読みは中学校のレベルであった。これらを踏まえ、国語の授業で单元テストの他に小テストで繰り返し反復学習をした。
- 係り受けは朝の帯時間の「書き写し読書」で文学作品等の書き写しを反復した。

数学では文字式の加法、減法、乗法、除法や比例式、立式等の技能に課題があったので、個別指導に近い体を工夫して丁寧な指導に取り組んだ。

#### 数学の学力を向上させる具体策

- つまずきの大きな子供を対象に IMO-ZO 学習教室(地域未来塾事業)へ参加させ、少人数の中で繰り返し学習した。
- 文字式を学習する第 1 学年の少人数・習熟度別指導でつまずきの大きい子供の学級を編成し、教科担任とともに学習指導員と協力指導員が参加して教員一人につき 3～4 名の生徒による小グループを編成して個別に指導する手法を開発した。

### (2)課題

本校では定期考査を廃止して单元テストを導入したことにより家庭学習の質と量(学習時間)が改善して子供の学びの意欲や学力が向上しつつあるが、教員の作問や採点に時間を要する課題がある。

課題解決の考え方として作問を前提とせず(中学校は定期考査の慣例から問題を自作する意識が定着している)、既成の問題も活用する手立てを工夫する。採点については自己の採点方法に固執せず、PCを用いて一般化した方法に改善する手立ても有効と考える。今年度は働き方改革の観点から教育総務課へ相談の下、「記述式デジタル採点ソフト『採点ナビ』」を購入した。子供の手書きの解答用紙をスキャンし、モニター上で問題ごとにまとめて正誤をチェックし、得点を観点別に自動集計することにより業務を軽減するものである。

次年度は本ソフトウェアを活用して学力向上とライフ・ワーク・バランスの効率化に取り組む。



IMO-ZO コミュニティ・スクールでは第七小学校と第九小学校、第五中学校の3校が一体となって地域社会に貢献する児童・生徒を育みます。

教育課程のリデザインによる更なる学力向上の取り組み  
東大和市校内研究奨励校

令和2年2月発行

編集・発行 東大和市立第五中学校  
所在地 〒207-0033 東京都東大和市芋窪 5-1119  
電話 042-561-0050  
FAX 042-590-7032  
ホームページ <http://5c.hyama.andteacher.jp/>